

今年元永萬ノ夏、郭公京中ニミチノテ、頻ニ群リ啼ケリ、此鳥ハ初音ユカシキ鳥ナリトテ、スキ人ハ深山ノ奥ヘモ尋入例多キ事ナルニ、今ハケシカラヌ事ナリトテ、人耳ヲ峙ル程ナリケルニ、二羽ノ郭公空ニテ食ヒ合殿上ニ飛落タリケリ、野鳥入室、主人將去ト云本文アリ、此レ怪異ナリトテ、二羽ノ郭公ヲ捕テ、獄舎ニ被禁ニケリ、

〔平家物語六〕新院ほうぎよの事

このやうえんは、ゆうにやさしき人にておはしけり、ある時ほと、ぎすのなくをきいて、

きく度にめづらしければ、時鳥いつもはつねの心ち社すれ、といふ歌をよふでこそ、はつねの僧正とはいはれ給ひけれ、

〔吾妻鏡十九〕承元五年元建曆四月廿九日庚戌、未明、將軍家源渡御、永福寺、相模太郎殿候御共給、

其外範高、知親、行村、重胤、康俊等也、上下爲歩儀、是於此所、昨朝聞郭公初聲之由、依有申之輩也、至林頭、數刻雖令待之給、無其聲之間、空以還御、

〔十六夜日記〕う月のすゑになりければ、ほと、ぎすのはつねほのかにもおもひたえたり、人づてに聞ば、ひきのやつといふ所にあまた聲なきけるを、人き、たりなどいふをき、て、

忍びねはひきのやつなる郭公雲ゐにたかくいつかなのらん、などひとり思へども、そのかひもなし、もとより東路はみちのおくまで、昔より時鳥まれなるならひにやありけん、ひとすぢに又なかずはよし、稀にもきく人ありけるこそ、人わきしけるよと、心づくしにうらめしけれ、

〔徒然草上〕女の物いひかけたる返事、とりあへずよきほどにする男は有がたきものぞとて、龜山院の御時、玄れたる女房ども、わかき男たちの參らるゝごとに、郭公やき、給へると問て、心見られけるに、ながしの大納言とかやは、數ならぬ身はえき、候はずと答られけり、堀河内大臣殿源成は、岩倉にてき、て候ひしやらんと仰られたりけるを、是は難なし、かすならぬ身むつかし